

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 本プロジェクトの紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002744">https://doi.org/10.15084/00002744</a>

## 本プロジェクトの紹介

### ○名称

近現代日本語における新語・新用法の研究

### ○略称

新語・新用法研究

### ○プロジェクトリーダー

新野 直哉

### ○研究分野

言語学

### ○キーワード

言語学、日本語学、日本語教育

### ○概要

近現代の日本語においては、次々に新語が生まれ、また以前からある語句でも、意味・用法の変化が次々に起きている。その中には、流行語のように一時的に多用されたり、メディアで話題になったりするもののほか、いつの間にか定着してしまうものも少なくない。それらの新語・新用法に関する、発生・浸透・定着の時期やそのプロセスという言語変化そのものについての研究、さらにその背景にある、正誤・好悪・美醜などに関わる一般社会の言語意識の問題について、研究を行う。必ずしも語彙研究には限定せず、文法・表現法等に関わる事例も対象とする。

本研究では、現在進行中の言語変化を分析することにより、一般的な言語変化研究に応用できる理論を得る。また国語教育・日本語教育分野へ貢献するとともに、国民の知的関心に応える。

### ○共同研究者（所属）

橋本行洋（花園大学文学部）、梅林博人（相模女子大学学芸学部）、島田泰子（二松学舎大学文学部）、鳴海伸一（京都府立大学文学部）

### ○研究目的

本研究は、近現代日本語の新語・新用法について、いつごろ、なぜ、どのように発生・拡大し、現在はどのような状況にあるのを、文献調査に加え、アンケート調査や統計的手

法などを用いて明らかにしていく。また、言語変化の背後にある正誤・好悪・美醜といった言語意識についても調査・記述し、言語の変異そのものの記述的研究に加え、これまで顧みられることの少なかった言語意識の面からも言語変化の要因を明らかにする。

本研究で扱う現在進行中の変化は、古代語や中世語の言語変化の事例に対し、そのプロセスの観察や、背景にある言語意識の調査がリアルタイムで可能である、というメリットがある。その成果として、日本語史上の言語変化一般の研究に応用できるような理論を得ることを目的とする。以上の点で、本研究は、現在の時空間変異研究系のプロジェクトに不足している分野を補うものである。

## ○共同研究発表会記録

\*プロジェクトメンバー以外の発表者には所属（当時）を付した。

### 第1回共同研究発表会（2011年3月5日国立国語研究所）

- ・新野直哉「新語“なにげに”をめぐる国語意識—現代「国語意識史」記述の試みとして—」

### 第2回共同研究発表会（2011年6月8日国立国語研究所）

- ・梅林博人「戦前戦中の「全然+肯定」の一側面—『古川ロッパ昭和日記』（戦前篇、戦中篇）を資料とし、同書の資料性にもふれる—」
- ・橋本行洋「近世中国語「全然」の日本語への受容について」

### 第3回共同研究発表会（2011年9月18日花園大学）

- ・新野直哉「昭和10年代の国語学・国語教育・日本語教育専門誌に見られる言語規範意識」
- ・島田泰子「全量性副詞と否定(的表現)との結び付き傾向について」
- ・余田弘実（京都西山短期大学）「近世から近代の”いためる”について—料理書を資料にして—」

### 第4回共同研究発表会（2012年6月10日国立国語研究所）

- ・橋本行洋「「断然」の受容と展開—「全然」の受容と“迷信”に言及して—」
- ・鳴海伸一「程度的意味発生の過程の類型—程度的意味と量的意味・評価的意味との関わり—」

### 第5回共同研究発表会（2012年8月28日二松学舎大学）

- ・新野直哉「『『青い山脈』（1947）の「全然同意ですな」について」
- ・中尾比早子（椋山女学園大学非常勤講師）「形容詞「すごい」の程度副詞化」

第6回共同研究発表会（2012年12月27日国立国語研究所）

- ・ 島田泰子「現代日本語における二格表現の衰微と交替—広義の“新用法”研究の一端として—」
- ・ 佐々木文彦（明海大学）「誤用から見た言語変化の方向性—“確信犯”“敷居が低い”を例に—」

第7回共同研究発表会（2013年6月23日ユニコムプラザさがみはら）

- ・ 上村健太郎（明海大学大学院生）「新語・流行語の使用の経年変化—新聞記事とインターネット検索における使用実態から—」
- ・ 梅林博人「否定呼応と言われた副詞の実態—古川ロッパの「とても」「てんで」を中心に—」

○研究成果一覧

（1）論文

- ・ 梅林博人「「全然」再考—迷信アプレ前提の否定など—」『相模国文』39号、71-82、2012
- ・ 新野直哉「昭和10年代の国語学・国語教育・日本語教育専門誌に見られる言語規範意識—副詞“とても”・「ら抜き言葉」などについて—」『言語文化研究』11号、1-14、2012
- ・ 梅林博人「『古川ロッパ昭和日記』における副詞「全然」の用法—言語変化の過渡期における個人の使用実態—」『表現研究』96号、44-53、2012
- ・ 島田泰子「広告表現等における〈終止形準体法〉について」『叙説』28号、1-16、2013
- ・ 島田泰子「現代日本語における動詞の〈終止形準体法〉について」『二松学舎大学論集』56号、21-40、2013
- ・ 新野直哉「言語規範意識記述を日本語史研究資料としてどう考えるか—3人の研究者の“全然”をめぐる記述を例に—」『国語学研究』52号、1-13、2013
- ・ 新野直哉「新語“なにげに”をめぐる言語意識—1980～90年代の新聞・雑誌記事を対象に—」『言語文化研究』12号、21-36、2013
- ・ 梅林博人「〈研究余滴〉『古川ロッパ昭和日記』の接続詞「ところへ」—「そこへ」との比較—」『相模国文』40号、115-120、2013
- ・ 新野直哉「“全然”に関する国語学者浅野信の言語規範意識—昭和10年代を中心に—」『表現研究』97号、1—10、2013
- ・ 鳴海伸一「副詞における程度的意味発生の過程の類型」『国立国語研究所論集』6号、93-110、2013

（2）発表・講演

A 発表

- ・ 新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子「言語の規範意識と使用実態—副詞“全然”

- の「迷信」をめぐって一」日本語学会平成 23 年度秋季大会、高知大学、2011 年 10 月
- ・新野直哉「「“全然”＋肯定」に関する日本語学研究者の言語規範意識」JLVC2012、国立国語研究所、2012 年 3 月
  - ・新野直哉「昭和 10 年代の“全然”に関する国語学者・浅野信の言語規範意識」日本近代語研究会第 293 回研究発表会、千葉大学、2012 年 5 月
  - ・梅林博人「言語変化の過渡期における個人の使用実態—古川ロッパの「全然」を例に一」第 49 回表現学会全国大会、共立女子大学、2012 年 6 月
  - ・新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子・鳴海伸一「漢語副詞の受容と展開—〈漢語の和化〉と否定との呼応—」日本語学会平成 25 年度秋季大会、静岡大学、2013 年 10 月

#### B 講演

- ・梅林博人「言語使用と規範意識—「全然」を中心に—」中京大学文学会春季大会、中京大学、2013 年 6 月